

自然の経験と共生の創造

— 後期ハイデガー哲学を基礎として —

景山洋平

周知の通り、ハイデガーの思想形成の諸段階において、「自然(Natur)」の概念は、幾つか異なった意味で用いられる。概括的にまとめると、第一に、『存在と時間』の実存論的分析の枠内に収まる「意味の空間」の構成契機としての自然を、第二に、形而上学期に、現存在の存在了解に先行する「全体における存在者」として要請されたメタ存在論的な自然を、第三に、一九三〇年代中盤以降から「大地」の術語と共に確立される、言わば「転回」後の自然を挙げられる。然るに、ハイデガーの後期哲学を「出来事(Ereignis)」の哲学として性格付けられるとすれば、「大地」とは《出来事としての自然》に他ならない。本発表の目的は、この《出来事としての自然》に定位して、《自然と技術》の関係を考察する事である。

この問題設定のポイントは、科学・技術がどんなに発達したとしても結局はなくならない、「何が起こるか分からない」や「意のままにならない」といった自然に関する生活世界的な実感を、単なる世間知を越えて、存在論的な問題として学的に検討できる事である。周知の通り、後期ハイデガーの「出来事」の哲学は、存在者の形而上学的解釈を突破する世界の原初的な立ち現れの経験を言葉にもたらした。然るに、経験の意味的統一の境界にあるこのような事象に照らしてこそ、生活世界的な水準での自然の変化の予料の利かなさや、こうした変化に曝される人間の傷つきやすい存在を、そして、このような《自然の経験》に臨んで技術を行使しながら共に生きる人間のあり方を、哲学的に検討できるのである。

具体的には、まず、「大地」概念において問題となるのは、根拠を与える余裕などないような仕方でも不意打ち的に訪れる存在者の変化、それも、存在者の全体的な連関を形づくっていた意味的脈絡が《解体》するような存在者の変化である。これについては、『存在と時間』の周知の例に則して、「ハンマーの柄が《不意に》折れ、体のバランスが崩れ、金具がすっぽ抜ける瞬間」を想えばよい。この時、身体や環境の事物は、それがそれまで則していたハンマー使用の遂行的秩序から逸脱する。そして、そのような不意打ち的な変化に置かれている限りで、身体や事物は、伝承されてきた意味的脈絡が織りなす歴史の「世界」から自らを「隠蔽(verschließen)」する。ここに、根拠を把握しようとする人間的営為 — これが技術の哲学的本質に接続する訳だが — が突き当たる絶対的な限界としての自然が表れる。然るに、こうした不意打ち的な変化は、大なり小なり、我々の世界のあらゆる場面に認められる。それは、例えば、意表を突く災害や、自分でそれと気付かないまま身体の老化が進む事、あるいは、生活形式を支える資源が

いきなり無くなる事である。こうした自然の変化に関する感覚とは、必ずしも、変化を予め科学的に予測する事で得られるものではなく、むしろ、突発的な変化が予測を越えて到来しえるというそれ自体は根拠付けられない不確かさの実感である。

それでは、技術的生を営む中で、このような《出来事としての自然》のリアリティを見失うことは、如何に生じ、如何なる帰結をもたらすか。ここに、自然を巡る問題圏において、後期ハイデガーの「立て組(Gestell)」概念の内実を検討する道がある。まず、技術的生において自然のリアリティが見失われる場面とは、具体的には、様々な技術的活動に影響を及ぼす自然の変化のリスクが忘却ないし隠蔽される状況である。こうした状況はなぜ生じるのか。まず、《出来事としての自然》が実感されている場合、人は、技術の専門家であれ素人の一般市民であれ等しく持ちえる《不可測な変化への緊張感》や、どんなに平穏な日々が続いても持ちえる《潜在的な変化への切迫感》を、実存的・身体的な構えのレベルで備えざるを得ない。ここに、自然に関するリスク知覚の構造について「大地」概念がもたらす寄与分が存する。だが、技術を実際に営む為には、自然のこうした不可測性の実感を多かれ少なかれ度外視して、表象できない事が生じたならば「仕方ない」と割り切る事が絶対に必要である。そして、人がいったん表象可能な目的と手段の技術的連関を生き始めるや否や、この観点からは、表象不可能な自然の変化など「考えるだけ無駄な不条理」に転化してしまう。こうした割り切りは、個々の技術的営為の内部だけで行われるのではなく、ハイデガーが「相互共同存在(Miteinandersein)」と呼ぶ最広義の社会的コミュニケーション連関における諸力の布置により決定される。そして、この社会的布置において、《出来事としての自然》の実感が行動の動機付けとしての実効性を失う時、技術を営む共同体は、自己完結的な基準によってしか自らを反省できなくなり、その基準を超える自然の変化やこれによって傷つく人々の存在への実感を喪失する。

だが、逆に、自然の原初的な不確かさに向き合う技術的生を構想しようとしても、表象不可能な自然の変化を《目的》とする技術などあり得ないので、差し当たり解答が困難である。これに対し、後期ハイデガーが「出来事」への本来的な関わり方として挙げる「準備(Vorbereitung)」が手がかりとなる。「準備」とは、表象不可能なものの到来の根源的受動性に臨む正にその為に、現在の自己性においてそれを確保する事を断念し、必ずしも自分自身ではない誰かに対してその経験の余地を空けておく事である。ここから、自然の不確かさに臨む本来的な技術とは、自然の不可測性を克服して完全に統制する技術でなく、必ずしも自分自身ではない誰かにとり不意打ち的な自然の変化が訪れたとしても、その者が自然を自らの生の場所として肯定できるように、予め「準備」しておく技術である事が導かれる。これは、それを営む者を越えた未来の者に差し向けられる点で、共生を創造する最もプリミティブな技術である。